

いんふおるむ (第52回)

コロンブスは英雄か悪党か

—調査にみるアメリカ国民の確信—

橋本 寛

(大きな驚き)

アメリカの多くの州では、クリストファ・コロンブスのアメリカ大陸発見を記念して10月の第2月曜日を「コロンブス・デイ」と法定休日としている。歴代の大統領（フランクリン・ルーズベルトからジョージ・ブッシュ）は、この日を祝う大統領声明を出している。

コロンブスの陸地発見は、「キリストの十字架による死以後、人類の歴史における最大の出来事」と歴史家ド・ランシーは評した。コロンブスの偉業を記念して、国会議事堂丸天井にサン・サルバドル島に上陸する彼を描いた絵が取り付けられ、国中の市や町に彼の記念像などが設置されている。

アメリカ人はコロンブスについて、小学校時代にどのような歴史教育を受けてきたのであろうか。これを示唆する本が最近出版された。「アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書」(ジェームス・バーダマン編、村田薫訳・ジャパンプック社・2005年)である。これは小学生用教科書(6冊)から歴史部分を抜粋したものだ。

本書の第1章はアメリカ発見から植民地までの歴史を扱っており、第3節「大きな驚き」にコロンブスが登場する。少し抜粋をする…『スペインのイザベラ女王とフェルディナンド王は、コロンブスに船と船員を与え、インディーズと呼ばれるアジアに行かせました。王と女王は新しい大陸を発見することには興

味がありませんでした。彼らはアジアの胡椒と香辛料が欲しかったのです。ヨーロッパで売ってたくさんのお金をもうけようとしたのです。また、彼らの宗教を広めたかったのです。コロンブスがヨーロッパから出航したとき、彼はまっすぐアジアに行けると思っていました。広大な太平洋があるなんて思いもしなかったのです。彼が南北アメリカ近くの陸地に出くわしたことは大きな驚きだったのです(略)コロンブスと部下たちは新世界と出会ったのです。1492年のことでした。』

この記述で注目すべき表現がある。陸地を発見したと言わず、陸地と出くわしたと述べたことだ。この本には挿絵があり「コロンブスの上陸」と題している。説明に「アメリカ大陸には1万年以上も前から先住民が住んでいた。その数は15世紀末まで800万人ほどだったという説もあれば、1億人近いという説もある。先住民から見れば発見ではなくて未知との遭遇だった」と述べている。たしかに、当時の南北アメリカには、メキシコのアステカ帝国やペルーのインカ帝国などに高度の文化が栄えていた。だから、コロンブスなどヨーロッパ人からみれば「新大陸」であり「発見」であっても、先住民から見れば「遭遇(出くわし)」であり、「異文化との接触」であった。

(ハイスクール歴史教科書の分析)

アメリカ国民はハイスクールの歴史教科書

でコロンブスをどのように教育されてきたのであるか。そして、コロンブスについてどのようなイメージをもって大人になっているのであろうか。

この問題を多角的に掘り下げた研究者（ミシガン大学シューマン教授、ジョージア大学シュワルツ名誉教授、前ミシガン大学統計コンサルタント ダルシー氏）の論文（エリート修正主義歴史家と大衆の確信—クリストファ・コロンブスは英雄か悪党か）がパブリック・オピニオン・クォーターリー・2005年春号の巻頭を飾っている。その研究方法について次に紹介しよう。

1944年から90年代までの全米ハイスクール歴史教科書55冊をコロンビア大学図書館より集めた。その内容について、コロンブスに関する記述と彼が会った先住民（アメリカ・インディアン）に関する記述とを記録した。次に、コロンブスとアメリカ・インディアンの各々について、記述内容が肯定的であるか、否定的であるかを判定した。例えば、コロンブスを「英雄」「アメリカ発展の貢献者」としてあれば肯定的、「捉えたインディアンをスペインに連行した」などの内容を否定的と分類した。一方、アメリカ・インディアンについて「最初のアメリカ人」と説明したり、インディアン文化を積極的に記述してある場合を肯定的、「幼児的で野蛮」などの内容を否定的とした。

第1表はコロンブス、第2表はアメリカ・インディアンについて記述内容を判定し、教科書の発行年代別に集計したものである。第1表（コロンブス）の大きな特徴は、1970年度が変動の分岐点であることだ。教科書内容を肯定的とする判定が44～59年代9割、60年代8割と多いが、70年代では2割弱に急落しており、コロンブスを批判する一部の歴史

家の意向が教科書記述に影響を与えている。

この変動は、1960年代に台頭した黒人の公民権運動が大きな原動力となっている。公民権運動から続く権利回復の動きは多文化主義の流れにのり、アメリカ・インディアンや少数民族をも巻き込んだマイノリティ運動に発展した。さらにベトナム反戦運動や学生運動が加わり、社会変革のうねりとなって70年代に突入した。この社会潮流がアメリカ・インディアンの立場を重視する修正主義歴史家の活動を活発にさせたのである。

**第1表 ハイスクール教科書の内容分析
（コロンブス）**

発行年代	1944～59 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代
肯定的	91%	83%	17%	40%	80%
否定的	27	17	42	50	50
不明	9	17	58	30	0
(教科書数)	(11)	(12)	(12)	(10)	(10)

第2表 （アメリカ・インディアン）

発行年代	1944～59 年代	1960 年代	1970 年代	1980 年代	1990 年代
肯定的	0	25%	58%	40%	50%
否定的	36%	42	8	0	0
不明	64	33	33	60	50
(教科書数)	(11)	(12)	(12)	(10)	(10)

コロンブスの記述は、44～59年代では彼の識見や自己犠牲の活動から英雄として扱い「文明への偉大な奉仕者」と賞讃されるが70年代以降では否定的内容が多くなり、コロンブスを含めて「ヨーロッパ探険隊は恥ずべき人」、「コロンブスやその部下はインディアンとその文化を破壊した」などの強い批判が出現する。

一方、アメリカ・インディアン（第2表）の特徴は単純なことである。コロンブスの場合は肯定と否定の判定が重複する。肯定とす

る内容がある反面、否定内容もあり、全年度について合計比率が100%を超える。インディアンは超えていない。70年度が変動の分岐点である傾向は、コロンブスの場合と一致しており、60年代までであった否定内容（半裸の未開人など）は70年代以降消滅し、まったく批判の対象となっていない。

要約すると、第1にハイスクール歴史教科書の記述は公民権運動から始まった社会変革の潮流の影響を受けている。第2にアメリカ・インディアンに関しては70年代以降否定的記述がなくなる。第3にコロンブスに関しては70年以降否定的記述が多くなる。第4にコロンブスは年代を問わず、肯定と否定の両面が指摘されている。第5にコロンブスの肯定記述は70年代に急減するものの、80年代には復活の兆しが現れ、90年代では60年代の水準に回復している。このことは、後でも触れるが、アメリカ・インディアンの権利回復を要求し、コロンブスを非難する修正主義歴史家やアメリカ・インディアン活動家たちの影響が必ずしも強くないことを示唆している。

なお、シューマン教授らは前記調査に続いて、小学校教科書（社会科）18冊について、同様の分析を試みたが社会科という雑多な内容とサンプルの少ないことが相まって、十分な結果が得られなかったと報告している。

（100年ごとの記念祭）

アメリカ国民がコロンブスについて思いを新たにする日は、「コロンブスの日」のほかには100年祭がある。上陸の1492年から300年目にあたる1792年には、記念祭がとり行なわれた。また、1892年10月の上陸400年祭は1年以上の期間をかけた大祝典行事が続いた。

400年祭記念式典の皮切りは、アメリカ大統領と全閣僚、最高裁長官、国会議員の大半がパレードの先頭に立った。そのあとを8万人以上の参加者が従った。この年は、世界コロンブス博覧会がシカゴで開催され、2700万人の観客が集った。開会式の演説者は、コロンブスを「人類の歴史における最高の恩人」と宣言し、博覧会の公式記録にそれをのせた。400年祭は祝賀ムード一色の一大イベントの日々であった。コロンブスを讃える声はアメリカ全土に満ち満ちた。

ところが、500年祭の1992年は形勢が急変した。まず出版界から異変が起った。1980年ハワード・ツインは「合衆国の民衆史」の第1章に、インディアンの立場からコロンブスや部下たちによる迫害を強調し、100万部以上売れ、11ヶ国語に翻訳出版された。1992年には、ジェームス・ローレンスが学生向けに修正主義歴史家の思想解説を加えた「コロンブスについての真実」が出版され、50万部以上売れた。

注目すべきは、世界で信用の厚い「コロンビア大百科事典」が、1993年及び2004年改訂版でコロンブスの記述を改訂し「コロンブスの航海は、ヨーロッパ人による植民地化という極めて冷酷な局面を象徴しており、かつ、ネイティブ・アメリカ人やその文化の破壊の始まりを代表している。コロンブスは、ネイティブ・アメリカ人や修正主義歴史家により、英雄の名誉を剥奪された」と述べたのである。これは正に180度の転換であった。

修正主義歴史家とは、先住アメリカ人（アメリカ・インディアン）の立場を重視する歴史家のことで、コロンブスの上陸をヨーロッパ人の侵略とみなし、奴隷制や大量虐殺の原因を作ったと批判するグループのことである。

注目すべきは、キリスト教団体の発言であ

る。5千万人以上の信者、36の宗派からなる全米教会評議会は教会のために次の決議文を出した。「コロンブスの侵略のために、ネイティブ・アメリカンは奴隷制や大量虐殺の犠牲となりました。今は500年祭を祝う時ではありません(1990年)」

スミソニアン博物館でおこなわれた500年祭記念展示では、コロンブスを英雄視する肯定展示とともに、アメリカ・インディアンや修正主義歴史家の見解を容認する否定展示をも実施され、異なる意見に配慮する2つの展覧会となった。

コロンブス500年祝賀祭に反対する強硬派は大学であった。1992年以降「コロンブスの日」には、反対の大学生示威行動が続いた。1997～2000年の大学新聞ニュース・データベースで「コロンブスの日」を取り上げた記事を検索したところ、60の記事のうち55は抗議の内容であった。

(500年祭とマス・メディア)

シューマン教授らの論文では、500年祭当時のマス・メディアが、コロンブスをどのような姿勢で扱ったかを、雑誌、新聞、テレビ、映画などについて調査分析している。

雑誌では、定期刊行物文献目録よりコロンブス関連記事62本(10年間)を検索した。コロンブスの名声に肯定的14本、否定的9本、肯定と否定の混在9本、その他(例えば500年祭記念の食事とか観光の紹介)30本という結果を得た。記事の半数は中立的であるが、残りは肯定的が少し多くなっている。

新聞では、ニューヨーク・タイムズ紙の50本の記事(80・90年代)のうち、6割(32本)が肯定的(例えばコロンブス船の模造船がニューヨーク港に到着)であり、否定的は18本であった。これらは修正主義歴史家やア

メリカ・インディアン活動家によるコロンブス批判を記事にしたり、言及していた。

シカゴ・トリビューン紙は14本(85～96年)のうち12本がコロンブス批判の立場であった。

地方紙(20紙)のデータを集めているアーカイブによると、コロンブスを扱った66本の殆どがコメントなしの報道記事であった。このように、新聞では全国紙はやや肯定寄り、地方紙は中立の立場であった。

テレビニュース・アーカイブによる3大テレビ・ニュース網の1992年データでは、コロンブスを扱った12本の報道番組のうち、4本は「コロンブスの船」のニューヨーク港到着を肯定的に報道、他は500年祭祝賀論争に関するもので、コロンブスへの批判に答える内容の番組を含んでいる。

公共テレビ放送では、1時間のドキュメンタリー番組の7回シリーズ物「コロンブスの時代」を製作した。コロンブスの航海の興奮の刺激を誘う肯定場面と同時に、インディアンに悲惨な結末をもたらすことになった否定的場面との両局面を注意深く取り入れている。これを視聴した世帯は4～500万と推計されている。

映画では、2本の映画「発見と1492年」と「天国の征服」が製作された。どちらも活劇映画で、概して、コロンブスを肯定的に描いている。ただし、前者でインディアンをひどく扱う場面があるが、コロンブスの部下(スペイン人)の責任に帰している。

以上がマス・メディアの動向をしらべたシューマン教授らのコメントであるが、教授は当時の状況を若干補足している。

第1は、連邦議会議事録(1992年)の500年祭に関する議事エントリーの144件のうち、128件が極めて肯定的であり、他は修正主義

歴史家の思想を述べたもの4件、擁護したものの2件、インディアンに肯定的ではあるもののコロンブスを批判しないもの10件であり、全体の9割近くがコロンブスに肯定的な立場であった。

第2は、連邦郵政省発行の500年祭記念切手の発売(4種)で、コロンブスがイサベラ女王に支持を請願している図柄、最初の航海(2種)、コロンブスの上陸(ただし、インディアンは描かれていない)図柄である。

(コロンブスは英雄か悪党か)

ハイスクールの歴史教科書で米国民がコロンブスをどのように教育されてきたかを先に述べた。また、米国民をとりまくマス・メディアがコロンブス500年祭を、肯定的に報道したのか、それとも否定的に報道したのかについて、これまで詳細に述べた。

それでは、一体、米国民はコロンブスをどのように受けとめているのであろうか。シューマン教授らは、1998年に調査員による面接調査を全米で実施した。ミシガン大学サーベイ・リサーチ・センター(SRC)月例調査に続いて成人(18歳以上)1511人に自由回答質問をした。「わからない」「ピント外れ」など206人を除外し、集計対象は1305人となった。

質問は1問だけ「もし、14歳くらいの甥か姪がきて、クリストファ・コロンブスについて、彼がどんなことをしたか教えてくださいと頼んできたら、あなただったら何と教えませんか…簡単におっしゃってください」

この遠回しの言い方は、対象者が個人知識のテストをされているとの不安を軽減するためである。また、「甥、姪が頼んできたら…」の場面設定は、国民の集団記憶(国民が共通に持っている記憶)が、年長者から幼児へ言

い伝えを通じて形成されるとの調査仮説に基づいている。なお、調査員は対象者の回答を逐語的に記録した。その記録を吟味したのち、理論的目的を考慮に入れて、次の(第3表)5分類に集計した。5分類はコロンブスについて最も肯定的な確信(英雄的伝説)から、最も否定的な確信(悪党)までの5つである。DK(わからない)やピント外れを除いて分類したため、5分類の1305人は意味のある回答をした人たちである。

第3表 コロンブスについての確信

分類	N	%
1 英雄的伝説のコロンブス	81	6.2
2 単純伝説のコロンブス	1,105	84.7
3 他のヨーロッパ人	43	3.3
4 インディアンがすでに生活していた	29	2.2
5 悪党としてのコロンブス	47	3.6
合計	1,305	100.0

①英雄的伝説のコロンブス…コロンブスがアメリカを発見したと述べるか或いは示唆した。さらに、コロンブスがとくに賞讃に値する点を指摘した回答。

回答例：コロンブスはアメリカの発見者であり、勇気や進取の気性に富んでおり、未知の領域に乗り出した。

②単純伝説のコロンブス…この分類に属する者の殆どは、基本的には「彼がアメリカを発見した」の回答またはその変型「例えば3隻の船に言及」である。コロンブスのアメリカ発見の事実を多く語っても、コロンブスの個人的特質の長所に言及しないかぎり①の分類には該当しない。

③他のヨーロッパ人…残りの3分類は、「アメリカ発見者」としての伝説的考え方に批判的な表現で抵抗している。最も穏やかな批判がこの③分類であり、コロンブス以前にすでに

他のヨーロッパ人がきたことを指摘した人である。1930年代のハイスクール教科書では、バイキングによる上陸を記述していたので、最近の修正主義歴史家の影響を受けてのコロンブス批判とは速断できない。

回答例：実際にはバイキングが最初に来た。

④インディアンがすでに生活していた…この回答は、コロンブスの伝説的考えに対し明確な批判をしている。コロンブスがインディアンと名付けた人々がすでにそこで生活していたのだから、コロンブスがアメリカを発見する筈がないという主張である。ただし、④の特徴は、「アメリカ発見者」としての伝説的見解は拒否するものの、修正主義歴史家の主要な論拠であったインディアンの処遇に関してはコロンブスを責めていない。

回答例：コロンブスがアメリカを発見したと言うが、彼は発見していない。ネイティブ・アメリカンが発見した。

⑤悪党としてコロンブス…この分類は、アメリカ・インディアンの先取権を承認するだけでなく、コロンブスをインディアン虐殺や奴隷化、伝染病流行の元凶と告発している。修正主義歴史家やインディアン活動家たちによる一貫した攻撃を受けている人と述べており、コロンブス批判の急先鋒である。

回答例：コロンブスはネイティブ・アメリカンに出くわしたが虐殺してしまった。

(単純伝説のコロンブス)

この面接調査の最大の発見は、コロンブスを「アメリカ発見者」と認定する第2分類「単純伝説のコロンブス」の回答者が85%と圧倒的多数を占めたことである。賞讃を惜しまず英雄視した第1分類「英雄的伝説のコロンブス」の回答者は僅か6%に過ぎなかった。一方、反対者の筆頭とも言うべき第5分類「悪党としてのコロンブス」の回答者も4%にとどまった。したがって、先住インディアンの先取権を承認している第4分類「インディアンがすでに生活していた」の回答者2%を合わせても、修正主義歴史家の立場を広く明確にした人は6%の少数派である。

この全体的な傾向は、白人以外のマイノリティでも共通するのだろうか。現在のアメリカ・インディアンは、強く「悪党としてのコロンブス」を主張するのではあるまいか。

第4表は人種別の結果である。一見して、インディアンは他人種と比べて悪党視回答が極めて多く(42%)、納得できる。だが残念なことに、インディアンのサンプルは12人と少なく、統計数値としては使わないほうが良い。

第4表 コロンブスについての確信(人種別)

分類	白人	ヒスパニック	黒人	インディアン
1 英雄的伝説のコロンブス	6.4%	11.0%	1.8%	0.0%
2 単純伝説のコロンブス	86.1	78.1	81.8	50.6(6)
3 他のヨーロッパ人	3.0	4.1	3.6	8.3(1)
4 インディアンがすでに生活していた	1.4	4.1	9.1	0.0
5 悪党としてのコロンブス	3.2	2.7	3.6	41.7(5)
合計	100	100	100	100
(N)	(1,069)	(73)	(110)	(12)

インディアン以外の表で驚かされるのは、ヒスパニックと黒人の数値が白人の傾向とかなり似ていることだ。コロンブスのアメリカ発見を答えた第2分類「単純な伝説のコロンブス」が白人 86%、ヒスパニック 78%、黒人 82%と8割前後の圧倒的高率を独占している。人種別に突出した回答はない。強いてあげれば、第1分類「英雄的伝説」を答えた人が白人 6%、ヒスパニック 11%、黒人 2%とヒスパニックが白人の約2倍あることで、これはコロンブスがスペイン女王の援助により実施できた航海であることを意識し、誇りに思っていることを示す。次に、インディアンの先住権を認める第4分類「インディアンがすでに生活していた」の回答が、白人 1%、ヒスパニック 4%、黒人 9%と黒人の割合が少し多いことである。これは黒人のマイノリティ意識のあらわれと思われる。

第3表に戻るが、第1分類の積極肯定(6%)や第5分類の積極否定(4%)が非常に少数であるのは、ことによると質問方法の欠陥が回答者の自由な意見表明を阻害したかもしれないとシューマン教授らは考えた。

そこで2000年8月に実験調査(N=126)をした。改めた点は冒頭の「簡単におっしゃってください」の言葉を削除したことである。この言葉は、回答を必要以上にぎこちなくさせ、思ったことを素直に話す気持ちを押えてしまうかも知れない。「簡単に話せ」という要求は意見の要約を要求されたと思うかも知れないとシューマン教授らは反省したのである。

しかしながら、実験調査の結果には何の変化も起こらなかった。

さらに、2000年10月に再び実験調査(N=130)を試みた。コロンブスのアメリカ発見という子供時代から聞いている決まり文句を思い出させるためには、多少の半強制的な言

葉があった方が良くと考え、冒頭の「簡単に…」の言葉の削除に加えて、「コロンブスについて、何か大事なことをつけ加えることができますか、それとも、もう無理ですか」を質問末尾に入れた。

この変更の効果は多少あった。積極肯定(英雄)は12%(6ポイント増)、積極否定(悪党)は8%(4ポイント増)となり、コロンブスのアメリカ発見の事実のみを回答した最大多数派の第2分類(単純な伝説)は68%で17ポイント減となった。回答者の口は少しなめらかになったのである。

しかし、この程度の減少では最近攻撃を強めている修正主義歴史家のコロンブス批判の影響を反映していないのではないかとシューマン教授らは考えた。設問の仕方にまだ問題が残っているかも知れぬと考え、3度目の実験調査を2002年2月に試みた。単純な伝説回答の再吟味に重点を置き、初回規模の大サンプルで実施した。面接時に第2分類の単純な伝説に該当する433人に対し、無遠慮な次の追加質問「若いアメリカ人は、クリストファー・コロンブスを尊敬すべきだと思いますか」と聞いた。もし、修正主義歴史家のコロンブス批判を知っていて、同意の気持ちがあるのなら「コロンブスを尊敬すべき」の回答が減る筈である。ところが81%(白人87%)がYES(尊敬すべき)と回答し、追加質問のプローブ(突っこみ)の影響はすくないことが分かった。

シューマン教授らは、結論として、コロンブスについてのアメリカ人の伝説的な確信(信念)は、修正主義歴史家やアメリカ・インディアンたちの高まる抗議にもかかわらず、コロンブスを「アメリカ発見者」として肯定的に受けとめ続けており揺るぎがない。さらに、少数のアメリカ人はコロンブスの英雄的

特質をほめたたえていると述べている。

すでにみたとおり、ハイスクール歴史教科書にあらわれた修正主義歴史家の影響は70年代より顕著であった。歴史教科書はコロンブスについて、肯定的な面と否定的な面との両面から公平に記述を進めていた。頭の柔らかい少年期に歴史意識が形成されやすいという通説に従えば、教科書の影響はあった筈である。

また、成人になってからの影響としては、マス・メディアの力は大きい。先に述べたように、雑誌、新聞、テレビ、映画などは、500年祭の前後にコロンブスの功罪を民衆に発信した。今まであまり耳にしたこともないようなコロンブスのマイナス面が民衆に到達し、心に刻印された可能性がある。

ところが、世論調査の結果は、前述したように修正主義歴史家が攻撃するコロンブスの否定面は殆んどあらわれなかった。自由回答方式の問いかけに反応した答は「コロンブスがアメリカを発見した」という言葉であって、85%という大多数の異口同音の反応であった。これは、「コロンブス」の刺激に対しての反射的な反応と言えるかも知れぬ。

(記憶の慣性)

ディスカバリーに乗った宇宙飛行士の野口さんが、宇宙ステーション補強のため大きな資材を取りつけるため、ディスカバリーのアームに乗って、資材をかかえて移動した様子が地球上で放映された。無重力なので重くはないが、力を与えて移動させると、その移動を止めるのは容易ではない。慣性の原理で、動き出した物体はなかなか止まらなると野口さんは語った。

この物理的現象の慣性が、人間の記憶にも働いている。シューマン教授らは「集団記憶」

という政治学の概念を用いて、記憶の慣性現象が「集団記憶」にもおこったと説明している。教授は「集団記憶」を「国やいろいろな機関が意識的な努力を重ねて、後世に伝え、維持された社会的な事実」とし、本論文の「記憶の慣性」の章で、アメリカ国民の記憶について絶妙な語り口で論じている。

「アメリカ発見者」としてのコロンブスの名は、どのようにして国民の土壌の中に浸透したのであるか。そして、その名前の記憶がどうして何時までも把持されたのか。

第1の理由は「コロンブスの日」が毎年あることだ。この日は小学校で教師は、コロンブスや3隻の船、サン・サルバドル島の海岸に到着するまでに排除した苦難の数々を繰り返しかえし話してきかせる。教師が好む・好まないに関係なく制度として、毎年反復される。

第2は、子ども達はコロンブスについて、小学校の1年から3年まで、読み方、書き方、物語の筋など教科書を通して、コロンブスを学ぶ。最近の教科書は、単にアメリカ発見者としてのコロンブスではなく、ヨーロッパ人にとって誰も知らなかった新大陸を発見した人として注意深く記述されている。さらに、色鮮やかな挿絵や未知の大洋での成功のてんまつなどは、子どもの脳裏に強烈にきざみこまれる。

第3は、「1492」という馴染み深い年号のリズムである。殆んどすべての人が、少年時代に学校で暗誦させられた数字である。大人になっても、「1492」の年号リズムは知らず知らずに不図口に出てくる。

第4は、少年期に形成された歴史意識は、成長してからも補強される。コロンブスの記念碑、彫像、絵画、コロンブスに因んで名付けた街路や公園などなどである。

第5は、コロンブスの名前自体が、新思想

の探究、個人の大胆さの象徴として用いられている。例えば、アインシュタインを「知的なコロンブス」と呼んでいる。コロンブスは確立した学説の安全な停泊をふりきって航海にでた。また、ニューヨーク・タイムス紙記者は、ゴルバチョフを「政治的なコロンブス」と呼んだ。何故ならゴルバチョフは現代の英雄であり、高い理念で出発し、古い思想を廃棄することによって、より良いものを作りあげたからである。このように、コロンブスの名前の好ましい言外の意味は、多方面で援用されている。

かくして、米国民全体の記憶となった集団記憶は、強固な民衆の信念となった。たとえ修正主義歴史家やアメリカ・インディアンによる激しいコロンブス批判を受けても崩れないのである。先祖から口伝えにきいたコロンブスの記憶は、学校や社会で反復され現在に至っている。この伝来の集団記憶は、確信となって次世代に伝わってゆく。たとえ、これを阻む力が外から加えられても、動きはとめられない。慣性となった記憶はとまらないのである。 (了)

(参考文献)

- ①Howard Schuman, Barry Schwartz, and Hannah D'arcy
“Elite Revisionists and Popular Beliefs: Christopher Columbus, Hero or Villain?”
Public Opinion Quarterly Spring 2005
- ②ジェームス・M・バーダマン 村田薫編
「アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書」
2005年3月 (株)ジャパン・ブック
- ③阿部珠理 「アメリカ先住民—民族再生にむけて」 2005年6月 角川書店
- ④フォルカー・ライヒェルト 井本响二・鈴木麻衣子訳 「世界の体験—中世後期における旅と文化的出会い」 2005年5月 法政大学出版社

